

Contents

四半世紀の祈り	1
2005年度「性・エイズ教育のための実践セミナー」報告	2
海外の雑誌記事より	4
WAVE さっぽろ 2006	5
活動報告	6
第6回総会・活動報告会のご案内	8

「四半世紀の祈り」

ふれいす東京 代表 池上 千寿子

3月8日、NHKのお昼の番組「スタジオパークからこんにちは」でふれいす東京の“Living Together Our Stories”が紹介されました。その1か月前程、立春の頃に都内の居酒屋で行われた「居酒屋Living Together」に参加したNHK解説委員の飯野奈津子さんが今度はスタジオで手記を音読し、居酒屋LTに参加した人達の思いや声を伝えてくれました。すぐに反響(さすがNHK)。視聴者の主婦の方から冊子の注文。読後に「これこそ友人に伝えたい」とさらなる注文がはりました。

HIVと共に生きている人達はその思いを言葉に託し、朗読されて音になって波のように言霊が広がってゆく。私は20年前の光景をおもいだしました。1987年の夏、暑いワシントンDCで開催された第3回国際エイズ会議。会場近くのアリーナの広い床1面にキルトがしきつめられていたのです。それはエイズキルトのビューでした。キルトはエイズで亡くなった方の魂に寄り添った「残された人」たちからの無言のメッセージですが、何よりも強力に「魂は共に生きている」ことを伝えていました。その圧倒的な光景は無言の衝撃として重く深く広がっていきました。キルトは91年に日本の9都市を巡回し、それを契機に多くの民間活動が始まりました。

キルト展から15年、メッセージを発するのは「残された人」だけではなくなりました。HIVをもつことを知った人たちから、今を共に生きているあなたへの語りか文字になり音になりわき出ているのです。それは隣人からかもしれない、親、子ども、パートナー、職場の同僚、友人、知人、親族からかもしれません。そしてうけとめたあなたが次の「あなた」へ伝えてゆく。

私たちがHIVを知ってから四半世紀が経ちました。エイズ流行の波はアメリカから東へ南へとすすみ、極東の日本も例外なくのみこまれていきます。でも地球を覆うのはウイルスだけではありません。ウイルスよりも強力な「思い」があるのです。「祈り」と言った方がいいかもしれません。国境もへちまもなんのその、言語や宗教が違っていても関係ない。縁あってこの世に生を受けたことへの畏敬と祈りです。それを一言で表すのがLiving Togetherなのだと思います。

日本語でなくてすみません。でも「共生しましょう」「共生するために」「共生を目指して」などと使われる「共生」ではないのです。HIVをもつことを知ったとたんに「共生しよう」と周囲からわざわざ言われなければならない対象になるなんてすごくおかしいと思いませんか？ HIVの「有無」、もっと厳密に言えば「有無を知っているかないか」ですが、それで今までとは違う対象になる(される)なんて腑に落ちません。

Living Togetherという思いが予防とケアを結ぶ手法に実をむすんでいます。これがふれいす東京の活動から生まれたことは私の誇りです。

ふれいす東京が活動をはじめたのは94年、この4月で13年目を迎えます。エイズの歴史の半分を共に歩んできたわけです。5月末には恒例の活動報告会が開催されます。活動報告会にあわせて年間活動報告書が発行されます。現在スタッフはこの「年間活動報告書05」の原稿作りと編集に頑張っています。とにかく地味かつ骨折りの作業ですが、日本NPOセンターの山岡義典先生が「ふれいす東京の活動報告書はNPOが範とすべきもの」と評価してくださいました。この評価を励みに今年も頑張っています。

そして今年、第20回日本エイズ学会・学術集会が5年ぶりに東京で開催されるのですが、その会長という重責をこの私がおひきうけすることになりました。20回目にして「初の女性会長」だとか。こうなると「断ったら女がすたる！」と反応してしまうのが私の常で、スタッフにはさらに負担をかけてしまうのです。

学術集会のテーマはもちろんLiving Together。盛りだくさんのプログラムを計画中です。基礎医学から臨床、心理や福祉、予防にケア、社会etc.をカバーする多彩な学会です。学術集会ホームページも開設しています。どうぞ覗いてみてください。11月30日から12月2日まで千代田区の複数の会場で行います。今年のエイズデーはLiving Togetherが合言葉！！

第20回日本エイズ学会・学術集会ホームページ
<http://www.ptokyo.com/20gakai/>

2005年度「性・エイズ教育のための実践セミナー」報告

今年度で3年目になるこのセミナーは、今年はさらにバージョンアップし、「今日から役立つセクシュアル・ヘルスの実践の取り組み」と銘打って行われました。授業展開コース/HIV支援と連携コースの各コース2日ずつ開催され、のべ100人以上が参加・修了しました。

おもなプログラム内容

- コースⅠ 授業展開コース(2006年1月28日-1月29日)
アイスブレイキング : 動物自己紹介、じゃんけんバンク
講 義 : セクシュアル・ヘルスとは何か、
ワーク構成・ファシリテーション
について
ワ ー ク : ビデオ教材を使用した模擬授業(ディス
カッション、シナリオワーク)、身
近なセクシュアルヘルス、HIV手記リ
ーディング
- コースⅡ 支援と連携コース(2006年2月18日-2月19日)
アイスブレイキング : トレード自己紹介、リクルート自
己紹介
ワ ー ク : 性に関する相談支援の課題マップ
づくり、高校生の妊娠事例
講 義 : 社会支援の原則、HIV支援におけ
る社会資源
スキットワーク : HIV感染不安事例、HIV陽性者対
応事例

「2005年度 JASE 性・エイズ教育のための実践セミナー」報告

野坂 祐子

ぶれいす東京の研究班がお届けする「性・エイズ教育のための実践セミナー」、早いもので、今年度はなんと3年目！プログラムをバージョンアップをさせて、主催の日本性教育協会(JASE)の会場へ乗り込んだ。今回のテーマは、「今日から役立つセクシュアル・ヘルスの実践の取り組み」。全国から、性・エイズ教育に取り組む多くの方々にお越しいただき、コース別・連続2日間(計4日間)のセミナーを開催した。受講生の皆さまに改めて感謝申し上げるとともに、充実した4日間のプログラムをご紹介します。

はじめに、このセミナーの位置づけを説明すると、厚生労働省エイズ対策研究事業「介入実践のための人材育成」の研究実践の一環として行われたものであり、プログラムにはぶれいす東京が続けてきたさまざまな調査研究や実践から得た知見が反映されている。対象者は、学校や地域で性教育や若者の性の健康に関する予防介入に取り組む方々30名。受講者を限定し、少人数での体験学習を基本としている。すでに、過去2年間のセミナーに参加された方も複数名、お越し下さり、受講者にそれぞれの現場での実践をお話しいただくのも、セミナーでの有益な情報として活かされている。



セミナーの全体進行と講義を担当する野坂氏

今回、新たに導入したのがコース制プログラム。従来の「ベーシック編/アドバンス編」の編成を改め、より受講者のニーズや学習目標にマッチしたプログラムを提供できるようにした。コースは2つあり、Ⅰは「授業展開コース」、Ⅱは「支援と連携コース」である。授業展開コースでは、学級や学校など集団への啓発・教育の方法を具体的に提示。そして、支援と連携コースでは、HIVについての個別支援について、実践的なワークを実施。セクシュアル・ヘルスの教育について、さまざまな対象者や規模において活用可能な情報をふんだんに盛り込んだのが特徴である。

そして、講義とワークによる体験型学習の両方のスタイルで、知識と体験から学びを深める、ぶれいす東京ならではのプログラム。各コースの内容は、別記のとおり。各コースとも、さまざまなタイプの自己紹介ワークやアイスブレイキングを楽しみながら、新しい知識を得て、さらにワークを通じて自分の気持ちや体験の気づきを深めていくように工夫されている。今回は、自己紹介もたっぷり用意。「動物自己紹介」「トレード自己紹介」「リクルート自己紹介」と(まるで企画者の自己顕示欲が丸出しのようだが)、さまざまな観点から自分を紹介するだけで、なんと“人材”としての自分の能力や長所をアピールできる。そして、他の受講者が自分と連携をとりながら活動をしていく“人材”として見えてくる。受講者の方々は、本当にさまざま魅力的な活動をされており、聞いているだけでみんなワクワク。スタッフも、「是非、一緒に組んで仕事をしてみたい」と大興奮だった。

また、今年度は新たに開発したワークも満載。コースⅠでは、ぶれいす東京オリジナル教材ビデオ『Let's CONDOMing』と、専用シナリオブックを用いての模擬授業を実施した。高校生が出演するこのビデオは、映像もさらに洗練され、ポップ度アップ。カフェテリア方式といって、授業の対象者や時間、学習のねらいに合わせて自由に組み合わせられる授業案を提案した。スタッフが講師役を務めた模擬授業2例では、ディスカッションを中心とした授業案と、シナリオ書き換えのワークやロールプレイなど、生徒が楽しみながら安全性行動を考えられる体験型授業案を紹介。また、2日目は、ぶれいす東京刊行『Living Together』の手記リーディングをしながら、HIVとともに生きるさまざまな人々への思いや自分自身の気持ちを話し合う時間をもった。

コースⅡでは、スタッフが相談場面を寸劇(スキット)で演じ、そのやりとりについて議論するワークを行った。HIV支援においては、技法を頭で学ぶだけでは活かされない。そこで、相談場面で生じるさまざまな問題や展開について、臨床的に捉えることをねらいとした。受講者の皆さんには、講師役・スキット役への温かいまなざしとともに、鋭い指摘を頂き、全員でさまざまな議論をすることができた。

最後に、そんな熱意ある受講者に負けじと、年々、ヒートアップしていくスタッフ陣についてご報告。恒例の“ファッション・チェック”に加え、今年はなんと“コスプレ”でワークに挑むスタッフも出現！スタッフ一同絶句のなか、エクステ(付け毛)、白衣、さらにはナース服(自前)と次々とお

色直しをして現れる勝又助産師。受講者の拍手喝采に迎えられ、ワークが始まる前からすでに満足げな様子であった。もちろん、その後のワークも大いに盛り上がり、一安心。また、今年度セミナーで講師デビューを果たした事務所スタッフ牧原氏。ああ見えても(?)、実は、社会福祉士。マジメな講義のあとには、スキットでゲイの男の子役を熱演。妙なリアル感がありましたが、はてさて。



コスプレ? スタッフの寸劇にも気合いが入ります。

セクシュアル・ヘルスの新たな方向性を開拓し続けるぶれいす東京。今後も、ユニークでキャッチーなセクシュアル・ヘルスの研究&教育に邁進していくつもりです。次回は未定ですが、またご一緒に、Let's Sexual Healthing!

「自分を知ることの大切さ」

中学校教諭 杉山 公章

セミナーに参加して、感じるの『安らぎ』である。一つの学校現場において、性教育に力を入れる人が複数いることは稀だ。議論しようにも、自分の足元を確認しようにも、その相手がいらない。しかしここに来れば、性教育に関心をもつ方ばかりの空間が待っている。これは私にとって、自分を振り返り、確認する上で重要な役割を担うセミナーなのだ。



グループワークのひとつ

1月のセミナーは、授業活用の可能なワークが続いた。映像教材『Let's CONDOMing』を用いた授業の組み方・世代別に性の問題点を探る・手記朗読など当事者と同じ目線に立って考えることを提供できる教材の提示があった。ぶれいす東京が掲げる Living Together の意志が脈々と流れるワークに、問題を抱えている相手と同じ気持ちになることは不可能であるが、同じ目線に立つことは可能だという教えをいただいた。生徒がテーマをいかに自分のこととして考えられるか、それはまず授業者が自らに潜む意識を知ることが必要だという提示であった。

2月のセミナーテーマは支援と連携。支援と連携はセットだという。これは通常の生徒指導でもあてはまる。生徒を支援する際、その支援の是非は時として複数の教員の視点により判断される。一人で支援すると、『ねばならぬ』という強迫観念が先に出てしまいがちだからだ。

実は、今回のセミナーは違うプログラムが予定されていた。しかし、午前のワークをスタッフで検討し、参加者に見合ったものに改訂していただけた。予定と異なる現状があれば、そこで臨機応変に変更できるフットワークのよさを体感し、これがまさに相談者に見合った支援であることを実感した。支援とは一人ひとり異なる。『高校生の妊娠』『感染不安』などという客観的な事実の一つであっても、相談者一人ひとり求めている支援は異なっている。相談者が求めていること

にいかにも近づき、安らぎの場を提供できるか。支援者には相談者の目線に合わせる力量が必要であり、自分自身の限界を知ることで、一人で抱え込まずに自らの限界後に対応ができる連携先を確保する必要があることを学んだ。それが相談者の幸せであり、同時に支援者の幸せなのである。

性教育は特別なことではない。教師として当然身につけていくべき技量をそのまま活用すればよいことを改めて感じ、肩肘張らずに自然体で授業をすることの大切さを再確認したセミナーであった。

「性・エイズ教育のための実践セミナーに参加して」

高松市保健所 藤川 愛

ぶれいす東京さんが行うこの性・エイズ教育のための実践セミナーに参加して、はや2回目となりました。(今回参加したセミナーは前半の授業展開コース)このコースを選んだのは、今まで中学生~大学生、養護・保健体育教諭らを対象に、保健所医師としてSTD/エイズ予防についてお話しする機会が幾度とありましたが、現実には性教育バッシングで表現に制限もかかり、体育館等に集められた大勢の生徒達を対象に、「性について知るべき必要なことをどのように伝えるか」は私自身の大きな課題となっていたからでした。

まず初日の池上さんの講義では、セクシュアルヘルス/ライツの概念を聞き、誰もが性的存在であり健康に生きるための権利を持ち、そのための情報やサービス提供を受ける権利があることをお話ししました。初めてこの講義を受けた時には、あいまいに感じていた性のもつ多様な側面について、とても分かりやすく明確にご説明してもらったと感じました。セミナーでは、終始グラドルルールのもと守秘義務が守られて相手の意見を尊重しつつ自分の話せる範囲で話ができる空間に安心感を感じ、工夫を凝らしたアイスブレイキングは場の雰囲気や和むのにとっても有効で、特にじゃんけんバンク(じゃんけんでおもちゃのお金のやりとりを行うゲーム)では、参加者同士が真剣に勝負していたのが大変印象的でした。講義やワークも最新の情報を惜しげもなく提供して頂き、特にセクシュアルヘルスの問題は生まれる前から死ぬまでどの年代と切り離すことなく関係するというワーク実習では、各年代で関係する性の問題(なかでも熟年離婚についての発表は今どきのテーマで興味深かったです)では私自身が気づけなかった性に対する気づきを促してもらいました。またHIV感染者の手記朗読のワークでは、感染者の手記を読んでお互いに話しあうことで、HIV陽性者の体験を自分自身に近いものとして置き換えて感じられる良い機会だったと思います。実は参加者も学校や病院、行政やNGOと各分野の第一線で活躍されている方も多く、研修参加以降も情報交換等でお世話になったりしています。ぶれいす東京さんには初回の研修参加以降から情報提供などで随分お世話になっておりますが、お互い顔が見えるこのセミナーを是非これからも続けてもらいたい!と思います。



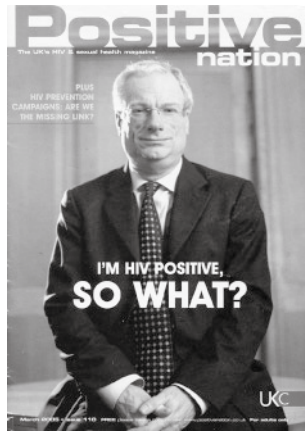
車座になって全体で振り返り

海外の雑誌記事より

Positive Nation 2005.3月号 クリス・スミス氏(英国 元文化大臣)インタビュー

翻訳ボランティアの協力を得て、海外のメディアから、興味深い記事を随時ご紹介させていただきます。今回はイギリスの雑誌「Positive Nation」に掲載された、イギリスの元文化大臣のクリス・スミス氏のインタビューです。「Positive Nation」はイギリスの非営利団体：UK Coalition of People Living with HIV and AIDSによって発行されています。

20年前にイギリスの国会議員として、初めてゲイであることをカミングアウトしたときにスミス氏はこう言った。“I am gay, so what?”(私はゲイですが、何か?)その彼が、2005年にHIV陽性であることを公表した。文化大臣などの要職についてきたスミス氏は、次期の選挙時に22年間の議員生活にピリオドを打つことを表明している。以下、Martin Hlynn氏によるインタビュー記事より要約。



Positive Nation 2005年3月号(表紙)

◆ HIVと共に生き、不安と共に生きる

1980年代にHIV陽性と診断されたときは、ハンマーで頭を殴られたようでした。HIVに感染していると聞かされたら、当時は誰もが、自分はすぐ死ぬのだと思ってでしょうね。しかし、医師が「ひどく悪い方向へ向かうかもしれないし、当面はよい方向で進むかもしれない。誰にもわからないのです。」と言ったことを鮮明に覚えています。併用療法のない時代でしたが、いったん不安と共に生きていくことを覚悟すると、今度はその不安に対処することを学ぶようになるのです。政治家という職業には浮き沈みがつきものですが、私の場合、そうした浮き沈みを潜り抜けてきたことが役に立ったのだと思っています。

HIVに感染していると診断された3ヵ月後、私はパートナーと一緒に、彼はいつも私の支えとなってくれました。それから、ほんの数人のとても親しい友人に私のHIVのことを伝えました。彼らの励ましや友情、サポートは、ずっと私を支えてくれたものの一つでしたね。

◆ 国会議員として、文化大臣としての日々

主治医のところに向かって車を走らせているとき、もしかして記者が何人か病院の前で待っているんじゃないかと胸をよぎったりすることもありましたが、幸いそういったことはなかったです。

ただひたすら、その状況を生き抜いていくだけです。もし、毎日、明日にでもテロリストに吹き飛ばされると考えて生活していたら、それでは生きていても何にもならないでしょう。前に進んでいくんだ、やってみよう、何かしら役に立つことをしようと思って、自分の人生を生きていくものなのだと思います。

◆ なぜ今カミングアウトするのか

HIV陽性になってから17年、HIV陽性であることは完全に個人的な問題だと考えてきましたので、カミングアウトしようとは思っていませんでした。体調もよかったし、公的保険で十分な医療も受けることができましたから、誰に何を言う必要もないと思ったのです。家族への影響も心配でした。両親には決して言いませんでした。父が亡くなり、母はまだ生きており、彼女を不安に陥れるのではないかととても心配でした。今でもまだ世間には相当な偏見がありますが、15年や20年前はもっとひどかったですから。

カミングアウトするきっかけとなったのはネルソン・マン

デラ氏(南アフリカ共和国元大統領)が、息子がAIDSによって他界したことを、タブーを破って世界に伝えた姿でした。それから、私がゲイであることをカミングアウトして20年経ったということもあり、今だ、と思ったのです。

◆ 世間やマスコミの反応

中には、陽性であることを早い時期におおやけにしなかったことについて、責める者たちもいました。しかし、陽性であることをカミングアウトするのは、誰にとってもかなり大きなステップです。良い理由がなければ大勢の人に伝えてまわるようなことはしないですよ。家族のことや他の理由もあって、話したくないことだと決めていましたが、今は何かを発することで、ささやかながら善い行いができるのではと思ったのです。しかし、何も言わないからといって、批判をするようなことは誰に対してもしたくありません。

勇気があるとも言われました。本当に不思議です。カミングアウトする前に、どんな反応が待っているのかが心配だったんですがね。見開きの特集を組んでくれた新聞もあり、事実に基づいた良い感じの記事もありましたが、「HIVはライフスタイルの感染症だ」と騒いでいた不快で無知な記事もありました。

◆ いま私にできること

私たちは、自分と相手を守るためのメッセージを、もっと伝える努力をしなければいけないですね。特に、最近では若い世代のゲイの間で、セーフター・セックスへの関心が多少落ちてきているので、このことは重要です。そして、20年間ゲイ・コミュニティで有効だったメッセージを、アフリカ系コミュニティでも活用できるようにするべきです。

単純な事実として、現在イギリスでHIV陽性とわかった人たちには、優れた医療やサービスが提供されますが、それはアフリカや発展途上国では全く異なるのです。治療アクセスの不公平はひどいもので、私たちは今まで以上にがんばらなければなりません。長期的な重要課題としては、HIVのワクチン開発のために、しっかりと資金援助しなければいけません。ブリア首相や閣僚とも話し合っていて、私も影ながら力になるつもりです。

◆ いくつもの山を越えて

私は山登りが好きです。1988年にHIV感染を知らされたとき、一つやるべきことがあるとすれば、長年の夢だったスコットランドの百名山を踏破することだと思いました。そして、それを実現することができたのです。今は、本を読んだり、音楽を聴いたり、劇を見に行ったり、映画を鑑賞したりしています。パートナーと私たちの犬との時間もありません。

政治の世界で生きて、HIVと共に生きてきたことは、ジェット・コースターの乗り方の練習をしてきたようなもの。嵐の中を冷静に超えていくような感じです。

HIV陽性の人たちへ。自分を強く持ち、悲観しないことです。人生を精一杯に生きて、立ち止まらなないと決めたら、自分でも驚くくらいやっていけるものです。

(翻訳ボランティア：千葉淳子、中住純也、望月隆美 / 要約：矢島 嵩)



Positive Nation 2005年3月号より

WAVEさっぽろ2006

札幌のゲイバーのマスター（ママ）たちによって結成されたS.M.Aが企画・運営（主催：札幌市）したHIV予防啓発イベントWAVEさっぽろ2006が2月26日に行われ、ぶれいす東京もブースを出展しました。

「WAVEさっぽろ2006 ～話し×勇氣～」

WAVEさっぽろ 代表 竹内 仁

2月26日、北海道札幌市において男性同性間対象のHIV/AIDS予防啓発イベント【WAVEさっぽろ2006】を開催しました。今回はWAVEの2回目のイベントとして内容の充実化、来場数の増員ともに向上させることができました。



某国営放送「しゃべり場」風？

会場内はメインステージをはじめ、センターステージ、東京から参加していただいた「アカー様」「ぶれいす東京様」のブースが設置されたカフェラウンジ、展示ブース、札幌拠点病院現職看護師と相談ができるカウンセリングブース、「RainbowRing様」のご協力での【EASY!】の大型展示スペースも実現し、さながら学園祭のノリで多くの対象者に『はなしかけるゆうき』を伝えられたのではないかと考えています。

メインステージでは、「エンジェルライブ名古屋様」のご厚意によりNLGR製作の映画を上映したり、札幌市保健所、各NPOからの講演を交えたバラエティショー、札幌市在住のアーティストによるミニライブなどを行いました。堅苦しいモノになりがちな講演もMCのセレブ(?)2人組のツッコミで会場は終始爆笑に包まれていました。センターステージでもミニライブは行いましたが、今回の目玉として【真剣GAYしゃべり場】は予定時間を大幅に超えて熱い語り会場は注目を集めました。タイトルを読んでピン!ときた方も多いと思いますが、国営放送の某番組にオマージュした「AIDSに関してぶっちゃけ話そうか」といった内容となりました。

日頃、ゲイバーではなかなか話せなかった深い内容がテーマになると会場でも驚きと、納得の表情を浮かべる対象者も多く見る事ができました。

今回のイベントの企画、構成、そして雑用に奮闘してくれたスタッフは全員ゲイバーマスター【S.M.A.(サッポロ・ママ・アソシエーション)】なのですが、前年度の1回目イベント終了後、すぐに多くの問い合わせを頂きました。このようなプロジェクトにゲイバーが協力するカタチでの参加は珍しくありませんが、スタッフ全員がマスターであることに興味集中したようです。札幌市とS.M.A.を結び動きが活発に行えたことが今回の成功に繋がったのではないかと考えています。

来年も、皆さんにお会いできることを楽しみにしています。



フライヤーより。今年のテーマは「話し×勇氣」(はなしかけるゆうき)

「WAVEさっぽろ～ママからお客への愛情物語～」

生島 嗣

東京からの飛行機から見下ろす北の大地はまだ真っ白であった。春の足音はまだ届いていないようだった。2月26日に開催されたこのイベントにはぶれいす東京から、おやかた、湯見、生島の3人のスタッフが参加した。



ぶれいす東京(奥)とアカーのブースが設置されたカフェラウンジ

OUR DAYSという冊子のブースでの配布、ビデオ上映とトーク、トークコーナーへの参加であった。

「WAVEさっぽろ」はこれまでの啓発キャンペーンとはちょっと違った人達によって運営されている。行政がスポンサー(全部の費用はカバーしていない)となり、企画や運営はゲイバーの普段カウンターの中になつ、ママ(兄貴)達がグループの中心を担っている。NGOはゲストとして招かれたの参加であった。

地域で生活するゲイ・バイセクシュアルにとり、ゲイバーはゲイであることを隠さずに話せる貴重な空間である。ここでは様々な会話が繰り広げられ、当然、セックスや恋愛に話が及ぶこともある。しかし、これまでHIV/AIDSについて触れることをタブー視する雰囲気が強かった。これは多くの地域の人達も同様の経験をしている。店主の立場からは、リラックスできる空間で、わざわざ現実を直視するような話題を取り上げることは、苦痛だと感じる人がいる以上、制限した方がいいという考えだったのかもしれない。

そんななか、2005年に始まったこのイベントでは、ママ達がお客さんのために、寝る間を惜しんで準備していたと聞く。直前には、週に4回～5回ものミーティングを開店前にしていたという。同じ生活スタイルをもっている集団だからこそできる業。お金の換算したら大変な数字になるだろう。

そしてイベント当日、ステージ上で、ビデオ出演で、裏方で地道な作業など、すべての作業をママ達を中心にこなしていた。そう、WAVEさっぽろは、ママ達15人が率先してHIV/AIDSと向き合う姿を、お客さんに見てもらうための仕掛となっていたのだ。

こうした彼等の実践をながめながら、ママ達がすでに顔見知りのお客に向けて、情報を発信することが、その地域の規範を大きく変える力になるのだと実感した。

イベントが終わり、何軒かのバーに寄せていただいた。普段、カラオケの歌詞がうつされているビデオ画面には、イベント情報に加えて、検査結果を聞いた後のゲイカップルの会話シーンが字幕入りで上映されていた。お客の一人が、「おれ、はじめてみた時涙がでちゃったんだよね」と話していたのが印象的であった。

活動報告他

— 各部門より —

ホットライン

エイズ電話相談（ふれいす東京および東京都委託）

◆ホットライン・ミーティング他活動状況（）内は出席人数

- 1月 6日 相談業務仕事始め
12日 HIV/AIDS 症例懇話会（5名）
13日 東京都電話相談連絡会（2名）
15日 世話人会（4名）／スタッフミーティング（16名）
23日 東京都エイズボランティア講習会（6名）
29日 第1回マニュアル作成プロジェクト（7名）
- 2月 10日 東京都電話相談連絡会（2名）
12日 追加HL部門別新人研修-第1日（8名）
19日 追加HL部門別新人研修-第2日（9名）
現役スタッフと新人の食事会（13名+シフト1名）
スタッフミーティング（17名+シフト4名）
臨時世話人会（4名）
23日 平日フォロースタッフミーティング（5名）
26日 第2回マニュアル作成プロジェクト（7名）
- 3月 17日 東京都電話相談連絡会（2名）
19日 世話人会（5名）
スタッフミーティング（14名）
21日 ホットライン学習会「陽性者対応について」（12名）

◆相談実績報告

— ふれいす東京エイズ電話相談 —

	1月	2月	3月
日数(日)	4	4	4
総時間(時間)	20	20	20
相談員数(のべ)	5	5.5	5.5
相談件数(件)	38	36	36
うち(男性)	34	31	30
(女性)	3	5	6
(陽性者)	0	3	0
1日平均(件)	9.3	9.0	9.0

— 東京都夜間・休日エイズ電話相談 — (委託)

	1月	2月	3月
日数(日)	12	12	12
総時間(時間)	36	36	39
相談員数(のべ)	31	32.5	38.5
相談件数(件)	204	204	254
うち(男性)	167	181	223
(女性)	33	23	30
(陽性者)	0	0	1
1日平均(件)	2	0	1

昨年9月の合同研修からの流れの、部門別研修も終わり、新人達の一生懸命な相談に刺激を受ける毎日です。更には、対応を今一度見直そうというプロジェクトもスタートしました。各スタッフの積極的に関わる姿は、頼もしく感じます。また1・2月に比べ、3月は相談件数が増加いたしました。内容は多岐に渡っていますが、全国的に進められている迅速検査の影響で、要確認(スクリーニング検査で陽性が判明し、確認検査中)の相談が、3ヶ月間で7件と増加傾向にあり、相談者の精神的な問題も微妙な時期で、対応を慎重にしなければなりません。そのため3月に学習会を行ないました。(報告：佐藤)

ぷ☆PEP

若者による若者のための予防啓発活動

★ティーンズ・クリニック実施状況

1月15日 2月19日 3月26日

★ピア・プログラム（）内はぷ☆PEP参加人数

3月22日 ピア・プログラム@都立第一商業高校（3名+生島）

★その他ミーティング実施状況

- ・ティーンズ・クリニック臨時ミーティング
1月21日（10名+池上、兵藤）
- ・ファシリテーター研修会
1月30日（6名+兵藤、講師：野坂）
- ・ピア・プログラム準備ミーティングなど
2月17日、24日、28日、
3月9日、13日、15日、17日、20日

★相談メール件数

1月：1件 2月：4件 3月：1件

1年間、月1回開催してきたティーンズ・クリニックがひとくぎりつきました。医療機関との連携は、ぷ☆PEPにとって初めての試みだったので、いろいろと悩むことも多くありましたが、そこから学ぶことも多く、いい経験になったと思います。

3月22日のピアプログラムは、対象が高校1年生、1回に90人程度（×2回）で、ぷ☆PEPから3人のメンバーが参加しました。高校から依頼されたピアプログラムは久々だったので、気づいた点、反省点などを大切に、今後の活動に生かしていきたいです。

(報告：じっつー)

バディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

◆バディ担当者ミーティング参加スタッフ数

(第1木曜 11:00～ 第3木曜 18:30～)

1/12	4人	1/19	3人
2/2	2人	2/16	3人
3/2	3人	3/16	4人

◆利用者数

6カ所の病院に通院中、もしくは入院中の15名の方のべ28名のバディスタッフを派遣

◆活動内容(2006年3月末現在)

派遣継続中	14件
在宅訪問	10件
病院訪問	3件
在宅への電話のみ	1件

◆1月～3月の派遣調整

新規派遣 1件

◆バディ担当中のスタッフ構成(3月末現在)

女性14名 男性8名

◆バディの現場から

1月に入り、1件の新規派遣が始まりました。新人を含めて多くのバディが関わるようになっていきます。4月2日のお花見には、数名のバディ利用者の方の参加がありました。

今、2005年の活動報告書をまとめながら、バディ活動が皆さまの協力なしでは成り立たないことをしみじみ実感しています。今後とも協力いただけますよう、どうぞよろしくお願いたします。(報告：牧原)

ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのスペースとプログラム

◆ネスト利用状況

	オープン日数	延べ利用者数	(うち新規)	(*ファシリテーターなど)
1月	23日	120名	(12名)	(5名)
2月	25日	128名	(10名)	(7名)
3月	27日	175名	(9名)	(24名)

(*はファシリテーター、web NEST 運営委員、お茶会、講習会などの企画・運営などの役割を担っているネスト利用者)

◆ピア・グループ・ミーティング (PGM)

- ・新陽性者 PGM 第 26 期 (参加者 7 名)
2/4 2/18 3/4 3/18 (修了)
- ・陰性パートナー・ミーティング: 1/14 (3名) 2/11 (4名)
3/11 (3名)
- ・ミドル・ミーティング: 1/14 (9名) 2/11 (8名)
3/11 (9名)
- ・カップル交流会 1/8 (10名)
- ・既婚男性小ミーティング 1/21 (3名)
- ・教師小ミーティング 1/28 (3名)
- ・女性小ミーティング 2/3 (3名)
- ・もめんの会 2/22 (3名)

◆イベント

ネスト庵新春茶会 1/28 (ご亭主 1、参加者 15)

◆ミーティング (陽性者メンバー、ぶれいす東京スタッフ)

- ・新陽性者 PGM ファシリテーター・ミーティング 3/28 (7、5)
- ・PGM マニュアル検討会 2/21 (3、4)
3/14 (4、3)
- ・web NEST 運営委員会 1/19 (1、2) 2/16 (1、2)
3/7 (2、2)
- ・ネスト世話人準備会 1/31 (1、3) 2/24 (1、3)

◆ネスト・ニュースレター

1/20 1月号発行、2/20 2月号発行、3/17 3月号発行

◆PGM マニュアル完成

昨年に引き続き、2/21、3/14に行われた PGM マニュアル検討会を経て、「新陽性者 PGM 実施マニュアル 2006 年 3 月版」が完成。ファシリテーターだけでなく、こういったプログラムの開催を検討している人たちに役立つツールとして作られました。

◆新春茶会開催

1/28に開かれたネスト庵の新春茶会は、ご亭主の方が初釜の設えをしてくださりました。多くの方が参加して、とてもにぎやかなお茶会になりました。ネストを優雅な空間にかえてくださるご亭主に感謝。次回は 6 月の予定です。どうぞお楽しみに。

(報告: はらだ)

Gay friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動

<http://gf.ptokyo.com>

◆Gay Friends for AIDS 電話相談

1月 6件 (平均 1.5件) 2月 8件 (平均 2.0件)
3月 9件 (平均 3.0件)

◆新年会しました (1月14日)

焼き肉を囲みながらスタッフの「私の 2006 年の抱負！」大会。仕事に恋愛に生き方に、みんなそれぞれ考えてるんだなあ、って思いました。さあ、今年も G フレはテンションを上げていきますよ〜っ!

◆WAVE さっぽろ 2006 (2月26日)

今年も WAVE さっぽろにてブースを出しました。詳細は P5 (報告: タカシ)

HIV陽性者への相談サービス

◆相談実績 2006 年 1~3 月

2006 年	1 月	2 月	3 月
電話による相談	50	63	59
対面による相談	42	52	54
E-mail による相談等	144	95	66
うち新規相談	19	24	17

※メール新規は含まず

◆新規相談者の属性 (N=60)

陽性者 (男性: 47、女性: 6) パートナー (男: 2、女: 2)
親 (女性: 2) ゲイバーのママ (男: 1)

◆新規相談者の情報源 (N=60)

web: 13 看護師/コーディネーター: 6
パートナー: 5 パンフレット: 5 カウンセラー: 4
ソーシャルワーカー: 3 医師: 3 他団体: 2
友人・知人: 2 他の陽性者: 2 電話相談: 2
医療機関外来: 2 ゲイバーのママ: 1 検査所/保健所: 1
不明: 9

◆新規相談の内容

保健所迅速検査の判定保留でパニック/検査結果の意味がわからない/自宅に術前検査の結果のハガキが届く/健康診断のオプション検査で陽性/妊婦検診で陽性。その後病院スタッフが異動し通院しにくい/投薬を開始し副作用が強く大変/C型肝炎があり専門的な治療を受けたい/海外在住で帰国予定。日本の状況を知りたい/カップルと一緒に検査に行き一人が陽性で混乱/これまでセックスをした相手に告知したい/感染がわかった客があるので情報提供してあげたい (地方のゲイバーのママ) /パートナーと同居予定だが告知をしていない/異性愛の男性陽性者と交流したい (女性) /地方在住で他の陽性者に会ったことがないが交流してみたい/ PGM に参加希望/ボランティアがしたい/パートナーが違法薬物で拘留/ドラッグの問題を抱えている/カリニ肺炎発症で入院中だが手帳のことを聞いてない/医療費は大変だが日本での生活を希望 (外国人) /保険証がないが服薬開始の時期。帰国しても周囲から拒否されるのではと不安 (外国人) /医療不信で転院。他の陽性者と会ったことがない。就労について不安/息子がカリニ肺炎で入院中。地元での手帳申請に不安/住む場所がなく国民健康保険に入れない/薬剤変更で精神的なバランスを崩す/セファールを心がけてきたので感染の事実を受け入れ難い/メンタル面で不安定さがあるのでネットワークを広げたい/病棟で一人なので誰かと話したい。治療を拒否したい。
(報告: 牧原/福原/生島)

研究部門

厚生労働省委託 厚生労働科学研究

- ◆「HIV 感染予防対策の効果に関する研究」(2003 年度から)
人材育成事業として 1 月 28 日 (土)・29 日 (日)、2 月 18 日 (土)・19 日 (日) の 2 日連続×2 回にて、「性・エイズ教育のための実践セミナー」を (財) 日本性教育協会と実施、多くの参加者を得ました。詳しくは、P.2~3 をご参照下さい。

また、「HIV 陽性者から周囲の人への陽性告知状況」をテーマに Web 調査を行い、155 名の方から回答を戴きました。地域のクリニックと協働での若者向け HIV 予防啓発活動も、引き続き月一回のペースで開催しました。

こうした調査や実践活動等の分析をまとめ、平成 17 年度の研究報告書と、3 年間の総合研究報告書を作成しました。

- ◆「HIV 感染者の地域生活支援におけるソーシャルワーカーの連携に関する研究」(2003 年度から)

陽性者が就職・就労に関係した場面で活用できるツール (冊子) を開発しました。この冊子は、就職や就労の際に病名の告知をしたいと考えた陽性者にとって、役立つツールとなっています。
(報告: 吉田)

特定非営利活動法人ぷれいす東京

第6回総会・活動報告会のご案内

恒例の総会・活動報告会を今年も開催します。各部門の報告では、普段の活動の現場感覚あふれた発表をお届けします。多様なスタッフの登場が活動の広がりを感じさせてくれます。

また、ゲストを招いてのトークコーナーのテーマは「学校でも家庭でもなく地域でできること」。東京シューレの朝倉景樹さんともう一人のゲスト（交渉中）と池上が、地域でできることについて対談します。

皆様、お楽しみに。ぜひご参加ください。

【日時】 2006年5月28日（日）

**【会場】 ECO としま 豊島区生活産業プラザ
多目的ホール（8F）**

豊島区東池袋1-20-15（池袋駅東口より徒歩7分）
TEL：03-5992-7011

総会 13:15～

* 総会の議決に参加できるのは正会員のみです。活動会員、賛助会員の皆様も総会にご出席いただけますが、議決権はありません。あらかじめ、ご了承ください。

活動報告会 14:00～ どなたでも参加可能です

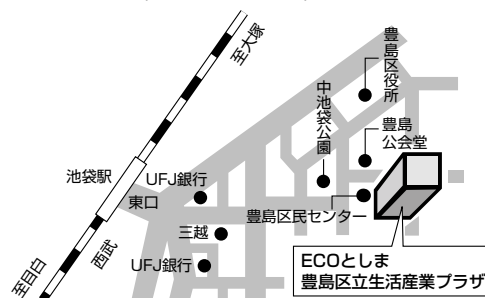
* ぷれいす東京の会員・賛助会員、寄付者・ネスト利用者・招待者は無料。それ以外の方は、資料代として1000円いただきます。

活動報告会プログラム

- ・あいさつ 池上千寿子
- ・部門報告
ホットライン、ぷ☆PEP、パディ、ネスト/PGM
Gay Friends for AIDS、HIV陽性者への相談サービス、研究部門、事務総務
- ・トークコーナー
「学校でも家庭でもなく地域でできること」
東京シューレ 朝倉景樹さん
ぷれいす東京 池上千寿子
他、お一人（交渉中）

* 活動報告会の終了後に懇親会が開催されます。どなたでも参加可能です／会費制

* 当日の連絡は下記の携帯までお願いいたします
ぷれいす東京携帯電話
090-6310-8981（昼12:00～）



■ ぷれいす東京より 賛助会員入会・寄付のお願い

HIV陽性者の数は年々増え続けています。新たな治療法は開発されていますが、治療を続けながら生活する上では様々な問題が発生しています。HIV陽性者とその周辺の人たちへの支援、コミュニティとして取り組んでいる予防活動等、私たちの活動へのニーズがますます高まっており、必要な運営資金も増え続けています。よりよいサービスやプログラムを継続するために、ぜひ私たちの活動を応援してください。

賛助会員入会のご案内

継続して応援して下さる方は賛助会員になってください。

--- 賛助会員になるには? ---

メールか電話/FAXで賛助会員入会をお申し込みください。折り返し、ぷれいす東京の案内と賛助会費専用の振込用紙をお送りします。

E-MAIL info@ptokyo.com

電話 03-3361-8964 FAX 03-3361-8835

年会費 個人賛助会員（一口）1万円

団体賛助会員（一口）10万円

寄付のお願い

そのほか随時寄付をお受けしています。ぷれいす東京の活動をぜひともご支援ください。ご寄付はいくらでも結構です。匿名でも可能です。

--- 寄付の振込み方法 ---

◇ ぷれいす東京の活動全般に対する寄付

郵便局 郵便振替口座 No.00160-3-574075

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 代表 池上千寿子

銀行 三井住友銀行 高田馬場支店 普通 2041174

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 代表 池上千寿子

◇ HIV陽性者への直接支援活動「ネスト/パディ」への寄付

銀行 三菱東京UFJ銀行 高田馬場支店 普通 1314375

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 代表 池上千寿子

◇ Gay Friends for AIDSの活動への寄付

銀行 みずほ銀行 高田馬場支店 普通 5507255

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 理事 生島 嗣

■ 編集後記

・ベランダのワイルドストロベリーが花を咲かせ、実をつけはじめました。幸せになれそうな予感…気のせい？（こんどう）

・年度末と活動報告会のはざまをぬってNL49無事発行です。ばんざーい！（やじま）

・今年のお花見は、朝の降水確率の予報が50%というなかでの開催でしたが、主催者発表で81人が集まりました。今年は曇り空、やや風があったので、花びらの舞を眺めながらの花見という風情のあるものでした。来年はどんな？（いくしま）

編集・発行: 特定非営利活動法人 ぷれいす東京

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-22-46 ザ・テラス304

TEL: 03-3361-8964（月-金 12:00～19:00）

FAX: 03-3361-8835

E-mail: info@ptokyo.com

ぷれいす東京HP: <http://www.ptokyo.com/>

Gay Friends for AIDS: <http://gf.ptokyo.com/>

web NEST: <http://web-nest.ptokyo.com/>

Sexual Health: <http://shw.ptokyo.com>